



野洲市環境基本計画では、持続可能な社会を作るため、野洲市の環境にとって望ましい将来ビジョンを定めていきます。その将来ビジョンを実現するために、市民・事業者・行政がパートナーシップによってさまざまなプロジェクト活動の実践を行っています。

平成20年度に実施したプロジェクト主催の学習会や啓発イベントには、年間延べ約1900人の市民が参加しました。

環境問題の課題はひとりだけの力では、決して解決しません。私たち一人ひとりが自分に何ができるのかを考えて、行動していくことが大切です。とはいっても難しく考える必要はありません。まずは、こうした活動に参加して体験することからはじめてみませんか。

さまざまな活動が実践されています！ ～環境基本計画のプロジェクト活動～

物品リユースの無償譲渡会 を開催しました！

粗大ゴミ等の減量をめざし、物品のリユース（再利用）の普及拡大を図るため3月22日(日)午前10時から市の遊休施設（旧消防署車庫）においてリユース物品の無償譲渡会を開催しました。

当日は52人が来場され、家具類やチャイルドシート、陶磁器類などをリユース品として再び使用してもらうことになりました。

今後も引き続きリユース物品が集まり次第、無償譲渡会を開催しますので、皆様のご協力をよろしくお願いします。



展示品に対する譲渡の状況

品名	出展数	リユース件数
洋タンス	1	1
茶タンス	1	0
チャイルドシート	6	3
ソファ（コーナー）	1	0
ラック	4	2
旅行カバン	1	1
手提カバン	6	1
陶磁器類（食器類）	多数	多数

■リユースにご協力ください！

家庭で不用となった物で誰か使ってくれる人はいないかなという気持ちを無駄にしないため、リユース対象品を集めています。

リユース対象品は「家具類・チャイルドシート・食器類・陶磁器類・バッグ類」の5品目でリユース利用の同意が必要です。

※詳しくは「広報やす」3月号をご覧ください。

問い合わせ…環境課 ☎ 589 - 6431、☎ 589 - 5069

家棟川エコ遊覧・湖魚の 伝統食・砂浜学習を楽しもう

びわ湖の水質が河川の水環境と密接に関係している様子を、実際にびわ湖から家棟川を手漕ぎ舟でめぐりながら楽しく学習することができます。

日時…5月23日(土)午前9時30分～午後2時30分※雨天の場合は24日(日)

集合場所…家棟川ビオトープ駐車場（家棟川河口東側）

対象…どなたでも、先着50人

内容…手漕ぎ舟による家棟川の自然体験学習、びわ湖の食文化体験、砂浜でのびわ湖学習

主催…NPO 法人家棟川流域観光船、びわ湖の水と地域の環境を守る会、環境基本計画推進会議「水と緑・安心の野洲」

参加費…500円 / 人

申し込み・問い合わせ…住所、氏名、年齢、電話、ファクスをNPO 法人家棟川流域観光船 ☎ 589 - 2267、びわ湖の水と地域の環境を守る会 ☎ 589 - 3939



ごみを減らそうポスター展！

市内の小学生が考えたごみを減らすための工夫やアイデアを描いたポスター展を開催します。子どもたちのアイデアを家庭や地域でも実践してみませんか。

日程…5月23日(土)～31日(日)

会場…市内の全コミセン※学区ごとに作品を展示します

内容…昨年12月、市内小学校4年生を対象に募集したマイバッグの持参や分別リサイクルなどのポスターを展示します。

問い合わせ…環境課 ☎ 589 - 6431、☎ 589 - 5069

歴史の小窓

—学芸員のメッセージ—

歴史民俗博物館

☎587-4410、Fax587-4413

休館日／月曜日、5月7日(木)

※5月4日(例)は開館します。

◆春期企画展 古代地方木簡の世紀「西河原木簡が語るもの—古代近江野洲の様相—」／5月31日(日)まで

野洲市の西河原遺跡群から出土した木簡をはじめとする文字資料やその時代の関連遺物を紹介。

(56)

- ◆記念講演会／5月10日(日)午後1時30分～4時
・「考古学からみた西河原遺跡群」畑中英二さん(滋賀県教育委員会)
- ・「西河原木簡が語るもの」大橋信弥さん(滋賀県立安土城考古博物館)

- ◆講座・展示解説／5月24日(日)午後2時～4時
徳網克己(文化財保護課)、角建一(博物館学芸員)

- ◆赤米作り教室 参加者募集／5月23日(土)午後2時～4時

弥生の森歴史公園で、古代の貫頭衣を着て「赤米」の田植えをしてみませんか。参加費無料。申し込みは同博物館へ。

とうひつ 刀筆の吏り

西河原遺跡群出土
硯



ていますが、以前は硯で墨をすって使う機会の多かったことをご存知の人も多いと思います。

古代の木簡に文字を記す際にも硯と墨が使われていて、市内の西河原遺跡群からは、木簡の他に硯や小刀も見つかっています。それらのうち、硯は、いわゆる現在の石製の硯ではなく須恵器という、古墳時代になつて朝鮮半島からの新しい技術によつて生産が始まつた硬質の焼き物です。須恵器は、ろくろを用い窯によつて高温で焼かれるために、それまでの土器よりも耐水性に優れ、複雑な形や細かな細工が施されるといった特徴があげられます。

写真は西河原遺跡群で出土した須恵器で作られた硯です。この時代の硯は円形の硯面に透かしをいれた脚がつく円面硯を始めとする硯専用のものと、須恵器の杯や杯蓋を硯として転用したものがあります。円面硯など硯専用に使われたものの数的な少なさを、硯面を観察すると使用痕跡がないものも多く認められること、一方、杯などは日常的に使うもので身近にあり入手しやすいなどの観点から、前者は特に硯としての実用的な意味合いの

木簡への筆記用具

他に、「文字認識」や「官人」等を表す象徴的な意味合いも含まれていたのではないかと考えられます。

このように、古代の官人は硯で墨をすり筆で木簡に文字を書いていました。ではタイトルにある「刀筆の吏」とはどういうことを示しているのでしょうか。

それは、西河原宮ノ内遺跡で57点にもおよぶ木簡の削り屑が出土していることと関係があります。それらは判別のつかないものが大半で、中には人名の一部や官職に関わる可能性のあるもの、和歌が記されたものなどを確認できますが、いずれもその厚さは薄いのが特徴です。つまり、「刀筆の吏」とは、一度使用した木簡の文字部分を小刀などで削り取り再利用していた官人を表す代名詞としてそのように呼ばれているのです。

筆や墨とともに当時の官人が携行していたであろう小刀。それは現在の私たちが持っている筆箱の中身と比較すると、さしずめ消しゴムのような存在といったところでしょうか。

(歴史民俗博物館学芸員 角建一)